

お伽訓話

五色の鹿

むかし／＼天然と云ふ國のある山奥にからだの毛か五色で角がまつ白の大きい鹿が、一匹住んで居ました。此山奥へはだれも來る人がないので立派な鹿の住んで居る事はだれも知つて居る人がありませんので鹿はいつ迄も／＼狩人にかまへられずに居りました。そして其山に一匹大きな鳥が住んで居ますので、鹿と鳥は仲のよい御友達で毎日／＼楽しく暮して居りました或小春日の溫い日いつもの様に二匹が連れ立つてあちこち散歩しながら

鹿『鳥さん／＼此山はほかと違つて人も來ず鐵砲の音もせず靜かで何とよいではありませんか。』

鳥』ほんとうに私共は仕合ですね。之で二人仲よく暮して居ればこんなよい事は
ありません、ごらんなさい向ふの谷の景色は何とも云へずよいではあり
ませんか、木々が紅葉した處は錦のやうですね。一つあつちへけふは行つ
て見ませんか。』

と誘はれますので、

鹿鳥さんのおつしやる通りいゝ景色ですあそこには川も流れて居ますからお
魚でもたべて來ませうさあ鳥さん私の背中へおのりなさいそうして早く行
きませうよ。』

と二人イヤ二匹は仲よく向ふの谷川へと行きましたそしてきれいな清水を呑み
おいしいお魚など澤山たべてさあもを之れでそろ／＼歸りませうと話して居り
ますと、まあ不思議何やら川の方で聲がします二匹とも生れてから人間など見
た事がなく人の聲も聞いた事もないので何やら分らず二匹ともびつくり仰天し
てまづ鳥が高い木の枝に止まつて何事かとあたりきよろ／＼見ながら。

鳥鹿さんく一體あの音はなんでせうねこゝへ上つた處何も見えませんよ、

何事でせう」

とキヨロくして下りて來ました、鹿もびつくりしながら。

鹿『あれがもしや人間の聲ではないでせうか』

とこわく二匹であちこちして居ますと川の中に何か大きなものが流れて來ますそしてそれがしきりにおがむのを見て鹿は可愛憎になり大急に水へ飛込で背中にのせ又岸へあがつて來ました、そうしますと其は此山の麓に住んで居る木こりでしたが逢あやまつて川へ落ち助けてくれくとどなり乍ら此迄流されて來た處でもし此鹿が居なかつたら死んでしまふ處でしたので大層よろこんで。

人『お蔭さまで助かりました何と御禮の申しやうもありませんどうして此御恩を報ひませう何なりとあなたのお望み事をおつしやつて下さい』

と云ひますので鹿は。

鹿『あなたが死ぬのが可愛憎故お助けしたのですから何も御禮などは入りませ

んけれど一つ御願があります外でもありませんがごらんの通り私のからだは五色の色をもつて居ますから人に知れ、ば此皮を取らふとてきつと殺されるにきまつて居ます此山奥にはまだ人と云ふ者が來ないので、こゝに住んで居るのですからどうか此山に私の住んで居る事を決して人に知らせて下さいますそれが何よりのお願です」

とくれぐれも申しましたきこりは、

人『尤の事です決して／＼だれにも申しません』

とかたく約束して鹿は山の上へきこりは下へと分れて行きました。

さてきこりのうちの人だちはおとうさんが朝出たきりいつ迄たつても歸つて來ませんので大變心配して居りました處が夕方になり頭からビツシヨリになつて歸つて來ましたので、うれしいやら心配やら皆口々に。

『おとうさんどうなさいました着物もビツシヨリ頭も水だらけですそれにお顔色もよくないしどうなさいました』

と右からも左からも聞きますが、木こりは鹿との約束を守つて只川へ落ちただけしか何も云ひませんでした。

さて話かわつて此國の王妃がある晩夢に五色の鹿がきれいなく花を澤山あたまへのせて御殿へ來た處をごらんになり、どうかして其鹿がほんとうにほしくてたまらず此夢を王様に御話なさつて、どうか鹿を捕へて下さいとしきりに御頼みになりました。

そこで王様も其鹿がほしくなりましたので國中へおふれを御出しになつて其鹿を探してつかまへて來た者には金銀珠玉は云ふに及ばず一つの國も御褒美にやると云ふ事が書いてありました。

それ故人々はどうかして五色の鹿を見つけたし大金持になりたいとみんな一生懸命にあちこちの山々を探して居りました。

ある日川に落ちた木こりが澤山の木を馬につみ都の町へと賣りに來ました。大分道も遠いので町へついた頃は大變くたびれましたから道端の石へ腰かけて休

んで居りますと鐵砲をかついた狩人が三人來て木こりの側により。

『若し之から向ふの方に山が見えますがあなたはあちらの方の人ではありませんか』

と聞きますから。

『はい私はあの山の麓に住む木こりですが何か御用ですか』

と云いますと一人か

『それではあなたあの山へ行つた事があるでせうがもしや五色の鹿を見た事は
ありませんか』

と云ひます木こりはけふこそ鹿への恩返しと思ひ。

『イ、エ私は毎日あの山へ木をきりに行きますがそんなものは見た事がありま
せん第一あの山は大層奥深くて昇ればのぼる程道もけわしくなりますしそれ
にあの山にはよくない獸で人さへ見ればたべるのが居るそうですそれ故親代
々住む私でさへ行つた事がありませんまああなた方もおよしになる方がよ

いでせう』

と誠にしく云ひますので狩人も心細くなり一人が。

『おや／＼それではまあ命あつての物種だからやめにしませうけれどどうかして五色の鹿をほしいものですねそうすれば急に一國の王様となり大金持になれるものを、何と皆さんそれでは他の山へ行きませうではありませんか』と云へばあとの二人も。

『實においしいが仕方ありません永年住んだ木こりが云ふのではほんとうでせうからやめてあそこの山を一つ探ませうよ』きこりさんどうもありがたうお蔭で命びろひしました。知らずに行けば大變な處どうもありがたう——と何度も御禮を云つて又もとの道へと歸つて行きましたさて此狩人の話を聞いた木こりは獨り言して。

今の人たちが何でも五色の鹿を見つければ王様で大金持になれるといったがほんとうかしら、もしそうなら知つて居るのは私だけだからいつでもつかま

へて行かれるが、そうすれば坊やだちにいゝ衣物もたくさん買つてやれるし
此御正月もおかちんでも澤山ついて遊んで暮さるゝし、そして毎日こんなに
寒い思して稼がなくともよくなる。あゝうれしい早速飛んで歸つてつかまへ
やう』

と馬も木も其まゝ一目散にかけ出しましたが。

いやゝとんでもない考へ違ひをした、いつぞや川へ落ちて死ぬ處を助けて
くれた恩ある鹿だつたそうゝそして其時かたく約束したのだつけ。あゝど
うしやう、あたしが云ひさへしなければだれも知る人はない今も三人の人へ
あの山へ行つては大變と教へてやつた之で少しでも鹿への恩返しが出来たと
よろこんだか、あの人たちの話を聞いて急に立派になりたく何の考へもなく
此迄來たが之はまちがつたゝさあゝ又木を賣つて早くうちへ歸りませう
あの時死ねば今頃は子供たちとも一所に居られない所。之も全く鹿のお蔭だ
つたのに一寸にもしろ其恩を忘れたのは、あゝ悪かつた悪かつた』

と考へ直し又馬の手綱を取り町々を賣つていくらかの御金にし夕方寒い風に吹れ乍らうちへ歸つて來ました。

そして木こりは鹿の事など思はず毎日木を賣つては歸り其御金で親子のしく暮して居りましたが、だんく人々の噂が大きくなりどうしたら五色の鹿が居る所か知れるだらうわれこそ一番にさがして御褒美をいたさかうと商買を休み仕事をやめて皆鹿探がしに夢中です。

それで此木こりの家へも毎日のやうに此上の山の道案内をたのみに來ますが其たんび木こりは。

『決してく此山奥へいらつしやるな。私が親代々ここに住んで居ますのでよく知つて居ますが此山へはまだ行つた人がありますません二三人は行つたやうですが皆獸にたべられて歸つた人は一人もありませんまあくおやめなさい』と云つてはとめて居ましたそして其度にけふも之で鹿が無事。あゝよかつた。と獨りよろこんで居りました、が一日ノとき、に來る人が多くなりますので

中にはとめてもかまわず行かうとする人さへあるやうになりましたので此木こりの方は一方ならず心配しました。そして又思ふのにかは此奥山まで行く人があるにちがひないそうすればきつとあの五色の鹿が見つけられ殺されてしまふし又見つけた人は王様から大變な御褒美をいたゞくのだそれぢや私の早く申し出た方がとくかも知れないと思ひましたそれから云ふもの毎日けふは行かう明日は行かうと思ひながら又助けられた恩を思ふと行くのもいやで毎日木も切らず仕事もしず獨り深く／＼考へ込んで居ります子供だちはそれを見て。

兄『おとうさん此頃はどうかありませんでしたか大變心配そうにたゞいさ許りつゝて考へていらつしやるが何か御氣にかゝる事がありませんか』

とたづねますと弟子も

弟『おとうさん年をとつてあんまり重いものなどかついだり遠い道をいつたりなさるのでくたびれたのではありませんか之から私だち二人でしますからおとうさんはうちにいらしてらくにして居て下さい』

と頼みます可愛子供たちにこう云はれますと此木こりはもを胸が一ぱいになりました。

『おゝ二人とも年も行かないのにおとうさんの身を案じてくれるはうれしいが
どうもこう貧しくてはお前だちにおいしいものもたべさせられずお正月でも
大きい嵐も買つてやられないので可愛憎でならない。どうかして大金持にな
つてお前だちを喜ばせたいとそれ許り毎日考へて居るのだ』

と云ひました兄の太郎。

『おとうさん／＼僕だちはちつとも大きい嵐などほしくないからそれよりかお
とうさん先のやうに元氣ににこ／＼して居て下さい之から僕だちも手つだつ
て働きますから』

と云つて慰めますので又其氣になり。

おゝ太郎も次郎もよい子ちやおとうさんはもを考へず元氣にするから心配し
ないでよいさあ二人ともあつちへ行つて仲よくお遊びして下さいくら人が頼ん

でも決してあの山へは道案内してはいけないよ

とよく云ひ聞かせて又いつものやうに木をうりにと出掛けました。道々山への道を聞かれる度に山奥の恐ろしい事を話しては止めて居りました。

王様の御殿ではいつ迄たつても五色の鹿が見つからないのでお妃は早く／＼とおせきになるしけらいだちはどうする事も出来ず一層もつとよい御褒美にしやうそれでないと商買をやめたり仕事を休んだりして居る人許りふゑて早く見つからなくては仕方がないからとて又々一つの國をやるほかに此國の王様のあとりにすると云ふ事をふやしました。

けれどもきこりは決して誰にも五色の鹿の居る所を教へませんでした。それで今も其鹿は生きて居るそをですが夫れは何處に居るのだから誰も知りません。私も知らないのです是れぎり御話ができません。さよなら。